

現代青年の友人関係に関する研究

松 永 真由美¹⁾
岩 元 澄 子²⁾

要 約

本研究の第1の目的は、現代青年の友人関係の特徴を明らかにすることであった。大学生228名に友人とのつきあい方に関する尺度を実施し、その因子得点をもとにしたクラスター分析の結果、「本音群」「無関心群」「気づかい群」「うわべ群」「独立群」の5つの群が見出された。

次に、友人とのつきあい方の5群による基本的信頼感・社会的スキルの違いを（目的2）、および精神的健康の違い（目的3）を検討した。上記と同様、大学生228名に、基本的信頼感尺度、Kiss-18、GHQ-28を実施した。その結果、基本的信頼感や社会的スキルは、本音群が他の群よりも高いことが明らかとなった。さらに、無関心群と独立群は、本音群より精神的健康が低いことが明らかとなった。

キーワード：青年期、友人関係、基本的信頼感、社会的スキル、精神的健康

問題と目的

青年期の友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的共鳴や同一視をもたらすような関係を特徴とし、これによって青年は新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されるとされてきた（西平, 1973）。しかし、1980年代半ば以降、自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけあわないよう、表面的に円滑な関係を求めるといった傾向が指摘され（東京都生活文化局, 1985；千石, 1991；栗原, 1996など）、実証的研究においても、こうした友人関係のあり方が見出されてきている（上野・上瀬・松井・福富, 1994；岡田, 1995など）。

一方では、他者への配慮の欠如や、他者への関心のなさについての指摘もなされている。実証的研究として、橋本（2000）は、内省傾向が低く、友達への気遣いが低い「無関心群」を見出し、中園（2003）は、友人との関係の深まりを避け、友人からの評価を気にせず、自己中心的な関わりをし、友人関係に対して関心

がない「無関心群」が存在することを報告している。以上のように、現代青年における友人関係の希薄化傾向の指摘に続いて、友人への配慮の欠如や他者の目を気にしない傾向、あるいは関係をもとうという意識の低さなど、友人関係に対する無関心といえるような傾向が指摘され始めている。

そこで本研究では、今日の青年が、友人とどのような関係を築いているのかを探索的に検討する。その際、一概に友人と言ってもその内容や意義は親密さのレベルや同性か異性かなどによって大きく異なることが指摘されている（吉岡, 2001；和田, 1993）ことから、本研究では、友人を「最も親しい同性の友人」（以下「友人」）と限定する。

また、青年の友人関係と心理学的諸要因との関連については、様々な視点から研究が行われている。内面的な視点としては、基本的信頼感がある。Erikson（1959）によれば、基本的信頼感は乳幼児期の発達課題であり、生後1ヵ年の経験から獲得される自己自身と世界に対する1つの態度であり、他者に関しては筋

1) 久留米大学大学院心理学研究科
2) 久留米大学文学部心理学科

の通った信頼 (reasonable trustfulness) を意味し、自己に関しては信頼に値する (trust worthiness) という単純な感覚を意味する。金子 (1994, 2002) は、基本的信頼感、青年期の良好な対人関係や親密性と関連していることを示している。行動的な視点としては、社会的スキルがある。近年、他者と適切かつ効果的に相互作用するための技能、すなわち社会的スキルが学習されていないことから、円滑な交友関係が築けず、対人関係上の問題を示す青年が増えているという指摘も多くなされている。社会的スキル不足を背景として、仲間外れや孤立といった交友関係をめぐる問題を契機とする不登校ケースが多数あることを指摘した文部科学省 (2001) の報告は、そのひとつである。また、橋本 (2000) は、大学生の対人方略としての深化回避が、社会的スキルの欠如に起因する可能性があることを報告している。以上のことから、現代青年の友人関係の特徴の背景に、基本的信頼感や社会的スキルの低さが推測される。

そこで、本研究では「友人」とのつきあい方の違いによって、基本的信頼感や社会的スキルに差異があるかを検討する。

さらに、青年の友人関係の精神的健康への影響として、東京都都民生活局 (1979) の調査では、学校において「よい友人がいない」とか「クラスみんなが冷たい」と感じている高校生は、孤独感が強く、精神的に疲労した状態にあることを報告している。堀・松井 (1981) では、友人と心理的な距離は大きく保ちつつ、友人関係に気をつかうクールな交友をしている青年は、精神的に疲労した状態にあることも示されている。そこで、「友人」とのつきあい方の違いによって精神的健康に差異があるかについても検討する。

方 法

調査対象と調査時期

大学生228名 (男子54名, 女子173名, 不明1名) を対象とし、2007年7月に調査を実施した。

調査内容

(1) 友人とのつきあい方

中園ら (2003) が作成した「友人関係への態度に関する尺度」を本研究の目的にあうように一部変更して用いた。すなわち全30項目のうち、友人とのつきあいにおける思いを問う項目は、友人との実際のつきあい方を表す表現にし、友人とのつきあい方に関する尺度として用いた。そして、「最も親しい同性の友人」を

想定してもらい、30項目に対し、6件法で回答を求めた。

(2) 自由記述

「最も親しい同性の友人」を想定してもらい、①友人とのつきあいにおいて心がけていること、②心がけている理由、心がけることがない人はその理由、③友人との理想のつきあい方について自由記述による回答を求めた。

(3) 基本的信頼感

谷 (1996) が作成した「基本的信頼感尺度」11項目を用い7件法で回答を求めた。この尺度は、「基本的信頼感」(6項目)、「対人的信頼感」(5項目)の2つの下位尺度からなる。

(4) 社会的スキル

菊池 (1988) が作成した「Kiss-18」18項目を用い、5件法で回答を求めた。

(5) 精神的健康

中川・大坊 (1985) による「GHQ 精神健康調査票」28項目 (以下「GHQ-28」とする) を用いた。「全くなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」などの4件法で回答を求めた。なお本研究では、各選択肢に対し、0点-1点-2点-3点を与えるリッカート法で集計し、得点が高いほど精神的に不健康となるように得点を算出している。

結 果

1. 因子分析

(1) 友人とのつきあい方に関する尺度

友人とのつきあい方に関する尺度30項目に対して、重み付けのない最小二乗法、直接オブリミン回転による因子分析を行ったところ、第1因子「関係深化回避」因子 ($\alpha = .88$)、第2因子「気づかい」因子 ($\alpha = .78$)、第3因子「群れ」因子 ($\alpha = .73$) の3因子が抽出され、因子負荷量が0.3以上の項目で下位尺度を構成した。

(2) Kiss-18

Kiss-18の18項目に対して、重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、第1因子「コミュニケーション能力」因子 ($\alpha = .80$)、第2因子「自己解決能力」因子 ($\alpha = .82$)、第3因子「関係調整能力」因子 ($\alpha = .82$) の3因子が抽出され、因子負荷量が0.3以上の項目で下位尺度を構成した。

2. 友人とのつきあい方についての検討

(1) 友人関係の分類

友人とのつきあい方に関する尺度の「関係深化回避」「気づかい」「群れ」の各因子得点を変量としたグループ内平均連結法によるクラスター分析を行った。その結果、友人とのつきあい方の5つのクラスターを抽出した。

次に各クラスターの特徴を明らかにするために、友人とのつきあい方に関する尺度の因子得点を、一要因分散分析により、クラスター間で比較した。その結果、「関係深化回避」 $F(4, 215)=60.304$ 、「気づかい」 $F(4, 215)=61.719$ 、「群れ」 $F(4, 215)=65.527$ 、ともに0.1%水準の有意な群間差がみられた。

TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「関係深化回避」については、第1クラスターは他の4群よりも有意に低く、第2・4クラスターは第3・5クラスターよりも有意に高く、「気づかい」は、第1・2クラスターは、第3・4・5クラスターよりも有意に低く、第3クラスターは第4・5クラスターよりも有意に高く、「群れ」については、第1・3・4クラスターは第2・5クラスターより有意に高かった。5つのクラスターにおける各因子得点の平均値と分散分析の結果をTable 1に示す。

以上の結果から、第1クラスターは、「関係深化回避」「気づかい」得点が低く、「群れ」得点が高かったことをふまえ、「友人」とのつきあいにおいて、深く、ありのままの自分で接している群と考え、「本音群」と命名した。第2クラスターは、「関係深化回避」得点が高く、「気づかい」「群れ」得点が低かったことをふまえ、「友人」とのつきあいについての意識が全体

的に希薄であると考え、「無関心群」と命名した。第3クラスターは、「気づかい」「群れ」得点が高かったことをふまえ、「気づかい群」と命名した。第4クラスターは、「関係深化回避」「群れ」得点が高かったことをふまえ、関係の深まりを避け、表面的な楽しさを追い求めるという特徴があると考え、「うわべ群」と命名した。第5クラスターは、「関係深化回避」「気づかい」得点はほぼ平均的であるが、「群れ」得点が低かったことをふまえ、「友人」とのつきあいにおいて、「友人」に対するある程度の気づかいと関係の深まりをもちながらも周りに左右されないという特徴があると考え、「独立群」と命名した。

(2) 自由記述にみる友人関係

①各友人関係群における「友人」とのつきあいにおいて心がけていることの検討

友人とのつきあいにおいて心がけていることの自由記述を、心理学を専攻する大学院生8名でKJ法(川喜多, 1967)により分類したところ、「本音でつきあう」「気づかいをする」「楽しくする」「傾聴と理解」「節度を保つ」「その他」の6つのカテゴリーに分類された。5つの友人関係群ごとに、「その他」を除く5つのカテゴリーの反応数と割合をTable 2に示す。

②「友人」とのつきあいにおいて心がけていることの背景の検討

友人とのつきあいにおいて5つの心がけていること別に、心がけている理由についての自由記述を、心理学を専攻する大学院生8名でKJ法(川喜多, 1967)により分類したところ、各々複数の理由に分類された。5つの心がけていること別に、5つの友人関係群ごとの各理由の反応数と割合をTable 3に示す。

Table 1 5つのクラスターにおける友人とのつきあい方に関する尺度の因子得点と分散分析の結果

因子	クラスター					F値	多重比較
	第1クラスター N=40	第2クラスター N=36	第3クラスター N=56	第4クラスター N=49	第5クラスター N=39		
関係深化回避	-1.168 (0.514)	0.851 (0.650)	-0.145 (0.703)	0.674 (0.733)	-0.226 (0.658)	60.304 ***	クラスター2=クラスター4>クラスター3 =クラスター5>クラスター1
気づかい	-0.675 (0.855)	-0.704 (0.572)	1.031 (0.532)	-0.174 (0.524)	0.081 (0.652)	61.719 ***	クラスター3>クラスター5=クラスター4 >クラスター1=クラスター2
群れ	0.374 (-0.671)	-0.867 (-0.577)	0.563 (-0.550)	0.437 (-0.628)	-0.940 (-0.593)	65.527 ***	クラスター3=クラスター4=クラスター1 >クラスター2=クラスター5

()内は標準偏差 *** $p<.001$

Table 2 各友人関係群の友人とのつきあいにおいて心がけていることについてのカテゴリ別反応数

カテゴリ	群(N)	本音群(44)	無関心群(26)	気づかい群(54)	うわべ群(37)	独立群(35)
本音でつきあう		20(45.4%)	11(42.3%)	13(24.0%)	13(35.1%)	8(22.8%)
気づかいをする		12(27.2%)	7(26.9%)	21(38.8%)	11(29.7%)	11(31.4%)
楽しくする		2(4.5%)	2(7.6%)	8(14.8%)	5(13.5%)	3(8.5%)
傾聴と理解		5(11.3%)	2(7.6%)	10(18.5%)	5(13.5%)	7(20.0%)
節度を保つ		5(11.3%)	4(15.3%)	2(3.7%)	3(8.1%)	6(17.1%)

()内は各群内における割合

Table 3 各友人関係群の心がけていることに対する理由についてのカテゴリ別反応数

「本音でつきあう」理由	カテゴリ	群(N)	本音群(20)	無関心群(11)	気づかい群(13)	うわべ群(10)	独立群(7)
	友達を大切に思い、分かりたいから		13(65.0%)	1(9.1%)	8(61.5%)	5(50.0%)	0(0.0%)
	ありのままの自分で接したいため		5(25.0%)	3(27.3%)	1(7.7%)	1(10.0%)	1(14.3%)
	友達が傷つかないように・友達を失いたくない		1(5.0%)	1(9.1%)	2(15.4%)	3(30.0%)	1(14.3%)
	自己中心的な理由		1(5.0%)	6(54.5%)	2(15.4%)	1(10.0%)	5(71.4%)
「気づかいをする」理由	カテゴリ	群(N)	本音群(12)	無関心群(6)	気づかい群(21)	うわべ群(12)	独立群(11)
	自分が傷つくことの回避		2(16.7%)	4(66.7%)	10(47.6%)	4(33.3%)	2(18.2%)
	友達が傷つくことの回避		0(0.0%)	0(0.0%)	6(28.6%)	5(41.7%)	0(0.0%)
	友達が大切だから		10(83.3%)	1(16.7%)	4(19.0%)	1(8.3%)	4(36.4%)
	いい関係を・長くつきあっていけるように		0(0.0%)	1(16.7%)	1(4.8%)	2(16.7%)	5(45.5%)
「楽しくする」理由	カテゴリ	群(N)	本音群(2)	無関心群(2)	気づかい群(8)	うわべ群(5)	独立群(3)
	いい関係づくり		1(50.0%)	2(100.0%)	4(50.0%)	2(40.0%)	1(33.3%)
	友達の評価を気にする理由		0(0.0%)	0(0.0%)	2(25.0%)	3(60.0%)	1(33.3%)
	楽しみたい		1(50.0%)	0(0.0%)	2(25.0%)	0(0.0%)	1(33.3%)
「傾聴と理解」理由	カテゴリ	群(N)	本音群(5)	無関心群(2)	気づかい群(9)	うわべ群(4)	独立群(5)
	分かりたいから		3(60.0%)	2(100.0%)	3(33.3%)	1(25.0%)	3(60.0%)
	友達が大切だから		1(20.0%)	0(0.0%)	4(44.4%)	2(50.0%)	0(0.0%)
	自分がそうしてほしいから		1(20.0%)	0(0.0%)	2(22.2%)	1(25.0%)	2(40.0%)
「節度を保つ」理由	カテゴリ	群(N)	本音群(4)	無関心群(3)	気づかい群(2)	うわべ群(3)	独立群(6)
	関係を維持するため		2(50.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(66.6%)	3(50.0%)
	適度な距離の必要性		1(25.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(33.3%)	0(0.0%)
	節度ない行動をされるのが嫌だから		1(25.0%)	3(100.0%)	2(100.0%)	0(0.0%)	3(50.0%)

()内は各群内における割合

③各友人関係群における「友人」との理想のつきあいについての検討

「友人」との理想のつきあいについての自由記述を、心理学を専攻する大学院生8名でKJ法（川喜多，1967）により分類したところ、「本音でつきあう」「一緒にいる」「お互いを必要とする」「節度を保つ」「今のままでいい」「その他」の6つに分類された。5つの友人関係群ごとに、「その他」を除く5つの理想のつきあいの反応数と割合をTable 4に示す。

3. 各友人関係群における基本的信頼感・社会的スキル

5つの友人関係群の基本的信頼感尺度、Kiss-18の

各因子の平均値をTable 5に示す。

(1) 基本的信頼感

5つの友人関係群において、「基本的信頼感」「対人的信頼感」の各因子の得点の一要因分散分析を行った。その結果、「基本的信頼感」 $F(4, 210) = 7.868$ 、「対人的信頼感」 $F(4, 210) = 17.023$ 、ともに0.1%水準で有意な群間差がみられた。

TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行ったところ、「基本的信頼感」は、本音群が他の4群よりも有意に高く、「対人的信頼感」は、本音群が他の4群よりも有意に高く、また気づかい群が無関心群よりも有意に高かった。

Table 4 各友人関係群の友人との理想の付きあいについてのカテゴリ別反応数

群(N)	本音群(37)	無関心群(29)	気づかい群(57)	うわべ群(39)	独立群(36)
本音でつきあう	16(43.2%)	12(41.4%)	34(59.6%)	17(43.6%)	17(47.2%)
安心して一緒にいれる	9(24.3%)	9(31.0%)	10(17.5%)	8(20.5%)	8(22.2%)
お互いを必要とする	7(18.9%)	4(13.8%)	12(21.1%)	8(20.5%)	7(19.4%)
節度を保つ	1(2.7%)	2(6.9%)	0(0.0%)	4(10.3%)	1(2.8%)
今のままでいい	4(10.8%)	2(6.9%)	1(1.8%)	2(5.1%)	3(8.4%)

()内は各群内における割合

Table 5 友人関係群別各尺度の平均値

	本音群	無関心群	気づかい群	うわべ群	独立群
N	40	35	54	48	38
コミュニケーション能力	3.73 (0.62)	2.66 (0.73)	3.23 (0.68)	3.17 (0.73)	2.89 (0.73)
自己解決能力	3.43 (0.72)	2.94 (0.70)	2.93 (0.70)	3.18 (0.70)	2.93 (0.72)
関係調整能力	3.38 (0.55)	2.72 (0.72)	2.96 (0.74)	3.00 (0.65)	2.85 (0.65)
基本的信頼感	4.85 (1.33)	4.00 (1.15)	3.64 (1.26)	3.70 (1.23)	3.52 (1.12)
対人的信頼感	5.99 (0.70)	4.37 (1.08)	5.36 (1.02)	4.92 (0.91)	4.84 (0.81)
精神的健康	0.89 (0.43)	1.23 (0.42)	1.03 (0.47)	1.12 (0.48)	1.28 (0.47)

()内はSD

(2) 社会的スキル

5つの友人関係群において、「コミュニケーション能力」「自己解決能力」「関係調整能力」の各因子の得点の一要因分散分析を行った。その結果、「コミュニケーション能力」 $F(4, 210)=12.624$ 、「自己解決能力」 $F(4, 210)=4.015$ 、「関係調整能力」 $F(4, 210)=5.253$ 、ともに0.1%水準で有意な群間差がみられた。

TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「コミュニケーション能力」は、本音群が他の4群よりも有意に高く、また無関心群は本音群・気づかい群・うわべ群よりも有意に低く、「自己解決能力」と「関係調整能力」は、本音群が無関心群・気づかい群・独立群よりも有意に高かった。

4. 各友人関係群における精神的健康

5つの友人関係群のGHQ-28の平均値をTable 5に示す。

5つの友人関係群において、精神的健康の得点の一要因分散分析を行った。その結果、0.1%水準で有意な群間差がみられた($F(4, 210)=4.695$)。

TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、独立群と無関心群が本音群よりも有意に高かった。

考 察

1. 現代青年の友人関係の様相

本研究において、現代青年の「最も親しい同性の友人」との関係は、友人とのつきあいに関する尺度の「関係深化回避」「気づかい」「群れ」の各因子得点から、「本音群」「無関心群」「気づかい群」「うわべ群」「独立群」と名付けた5クラスターに分類された。

(1) 本音群

本音群は、ありのままの自分で「友人」と深く関わったり本音で接したりしている群である。

「友人」とのつきあいにおいて心がけていることとして、「本音でつきあう」「気づかいをする」の割合が高かった。「本音でつきあう」理由は、「友達を大切に思い、分かりあうため」の割合が高く、具体的には、「自分にとってありのままの自分を受け入れ、アドバイスしてくれる大事な存在だから」「友人とは本音で話したいし、お互いに成長していける仲になりたいから」「お互い信頼して分かりあいたいから」などと記述され、「友人」との相互作用について言及しており、「気づかいをする」理由は「友達が大切だから」の割合が高かった。これらのことより、「友人」を大

切に思い、理解しあいながら関係を深めようとしていることが分かる。また、「友人」との理想のつきあいでは、「本音でつきあう」の割合が高かった。このことから、今以上に、「友人」と深く関わったり、本音で接したりしたいと思っていることがうかがえる。このような本音群の特徴は、岡田(1995)が現代青年の特徴として指摘している、お互いに傷つけあわないよう気をつかい、内面的な関わりを避け、表面的な楽しさを追い求める傾向とは異なり、西平(1990)が従来の青年期の友人関係の特徴として指摘している、親密で内面を開示しあい、人格の共鳴や同一視をもたらすような関係と一致するものである。友人関係の希薄化は、現代青年全体に見られる特徴ではなく、「友人」と深い関係を築こうとしている青年もいることが示された結果であると考えられる。

(2) 無関心群

無関心群は、「友人」に対して関係が深まることを避け、「友人」からの評価を気にしたり、気づかいをしたりすることが少なく、場を盛り上げるようなこともせず、「友人」とのつきあいについての意識が全体的に希薄な群である。中園・野島(2003)も、「無関心群」を見出し、この群は友人関係の深まりを避けると同時に評価懸念が低いという点で、今までの報告ではあまり見られることのなかった友人関係群であることを指摘している。本研究における無関心群は、中園・野島(2003)の「無関心群」に類似しており、前述の友人関係における希薄化傾向とは別に、最も親しい同性の友人にさえも、友人関係に対する無関心と言えるような傾向を示す青年がいることが示唆された。

「友人」とのつきあいにおいて心がけていることとして、「本音でつきあう」「気づかいをする」の割合が高かった。「本音でつきあう」ことを心がける理由は、「ただの良い人になりたくないから」「相手にあわせて演技したりするのは疲れるから」「うその自分になるから」などと「自己中心的な理由」の割合が高かった。また、「気づかいをする」ことを心がける理由は、「自分が傷つくことの回避」の割合が高かった。また、「友人」との理想のつきあいでは「本音でつきあう」「安心して一緒にいれる」の割合が高かった。これらのことから、もっと安心して本音で「友人」とつきあいたいという思いは大きいですが、それと同時に自分が傷つくことを避けようとする気持ちも大きいことがうかがえる。藤井(2001)では、友人に近づきたくても、自分が傷ついたり、寂しい思いをしたりすることを回避しようとする自分中心のジレンマが生じた場合、こ

のジレンマから逃れるために、友人との隔たりを大きくもって深い関わりや親密になることを避けようとするのが指摘されている。本研究における無関心群も、好んで関係が深まることや群れることを避けているのではなく、「友人」と安心して深くつきあいたい気持ちと同時に、自分が傷つくことを避けようとする気持ちも大きいので、「友人」との関係の深まりを避けたり、距離をとったりすることで、自分を守っているのではないかと考える。

(3) 気づかい群

気づかい群は、「友人」に気をつかう傾向が最も強いことが特徴である。また、場を盛り上げたり、楽しくしたりしようとする傾向も強い。

「友人」とのつきあいにおいて心がけていることとして、「気づかいをする」「本音でつきあう」の割合が高かった。「気づかいをする」の理由は、「自分が傷つくことの回避」「友達が傷つくことの回避」の割合が高く、お互いに傷つくことを恐れ、気づかいをしている記述が見られ、「本音でつきあう」理由は、「友達が大切に思い、分かりあいたいから」の割合が高かった。また、「友人」との理想のつきあいについては、もっと本音でつきあいたいと思っている人の割合が高かった。これらのことから、友達が大切に思う気持ちから本音でつきあうことを心がけたり、もっと本音でつきあいたいという思いは大きい、それと同時にお互いに傷つかないようにという気持ちも大きく、そのことから気づかいをしたり、楽しくふるまったりし、「友人」との適度な距離感がとれていないことがうかがえる。

菅原(1989)によると、親密な友情は、友人と距離をおくことを覚え、友人と自分は別々の存在であり、お互いの立場があることを認識すると同時に芽生えてくる。しかし藤井(2001)は、青年期は他の発達段階に比べて、「個」も「関係」も確立されておらず、相補的に成熟していく途上であるという。このことをふまえると、5つの群の中で最も人数が多かった気づかい群の特徴は、傷つかないように気づかいをしたり、楽しくふるまったりしながら、友人との適度な心理的距離を模索している段階の、友人との親密な関係を確立していく途上にある青年の友人関係を反映した結果ではないかと考える。

(4) うわべ群

うわべ群は、「友人」との関係の深まりを避け、楽しくしようとする傾向が強いことが特徴である。

「友人」とのつきあいにおいて心がけていることで

は、「本音でつきあう」「気づかいをする」の割合が高く、「楽しくする」の割合も他の群と比べると比較的高かった。「本音でつきあう」理由は、「友達が大切に思い、分かりあいたいから」「友達が傷つかないように・友達が失いたくない」の割合が、「気づかいをする」理由は「友達が傷つくことの回避」の割合が、「楽しくする」理由は、「友達の評価を気にする理由」の割合が高かった。このことから、本音でつきあったり、気づかいをしたり、楽しくしたりすることを心がける背景に、「友人」を傷つけることや、「友人」からの評価に対する恐れがあることがうかがえる。

また「友人」との理想のつきあいについては、「本音でつきあう」の割合が高く、具体的には「もっと本音でぶつかりあいたい」「もっと本当の自分を出して、気楽な関係のつきあい方」「真面目に話ができるつきあい」などの記述が見られ、好んで深い関わりを避け、楽しくふるまっているのではないことがうかがえる。これらのことから考えると、うわべ群は好んで深い関係を避けているのではなく、「友人」を傷つけることや、「友人」の評価を気にするあまり、深い関係にふみこめず、表面的に明るく楽しくふるまっていると考えられる。千石(1991)は、青年が他者から暗いと目立たない人間と評価され、仲間はずれにされることを極度に恐れ、そのために実際以上に明るくふるまい、深刻な話題を避けるといった傾向を指摘しており、うわべ群はこれに相当する、現代青年の特徴を反映した群と考える。

(5) 独立群

独立群は、たくさんの人と仲良くしたり、場を楽しんだりしようとはしないという特徴がある。このことは無関心群と同様である。しかし、「関係深化回避」「気づかい」得点が平均的であり、「友人」とのつきあいにおいて、「友人」に対するある程度の気づかいと関係の深まりは持つが、周りに左右されて場を楽しんだり、多くの人と仲良くしたりすることはない、自己を確立している群であるといえる。

「友人」とのつきあいにおいて心がけていることでは、「本音でつきあう」「気づかいをする」の割合が高かった。「本音でつきあう」の理由は、「自己中心な理由」が高く、具体的には「一緒にいて気をつかうと自分が疲れてしまうから」「一番親しいので対等にいたい」などの理由から本音でつきあうことを心がけていた。「気づかいをする」の理由は「友達が大切だから」「いい関係を・長くつきあっていけるように」の割合が高く、具体的には、「自分が望むことを相手に

無理強いしても伝わらない」「人にはそれぞれ考えがあり、友達だろうと家族だろうと口出しする権利はない」「一人の人間として敬わねばならない」「友達は一生のものだから」などの理由から気づかいをすることを心がけていた。このことより、独立群は関係の深まりを避けず、お互いを1人の人間として尊重し、大事にしながら「友人」とつきあっている群であると考えられる。

2. 各友人関係群における基本的信頼感・社会的スキル

(1) 基本的信頼感

本研究で使用した谷(1996)の尺度における「基本的信頼感」は、谷(1998)によれば、Erikson(1959)のいう基本的信頼感に相当するものであり、また、「対人的信頼感」は、現実の人間関係に基づく一般的な他者に関する信頼感であるとしている。また、金子(2002)は、基本的信頼感と親密性には正の相関があることを見出している。

これらのことから、「基本的信頼感」「対人的信頼感」ともに他の4群よりも高かった本音群は、すなわち、ありのままの自分で友人と深く関わる青年は、乳幼児期の経験を根拠として形成される基本的信頼感も、現実の人間関係に基づく他者への信頼感も高く、親密な友人関係を形成するための基盤をもつと推測される。

また、気づかい群は、「対人的信頼感」において、無関心群よりも高かった。本音でつきあいたいという気持ちをもちながらも、それと同時にお互いに傷つけないようにという気持ちも大きい気づかい群は、「友人」とのつきあいにおいて、深い関わりや群れることを避ける無関心群よりは他者に対する信頼感が大きく、現実の人間関係に基づく他者への信頼感を築くことができていることが推測される。

(2) 社会的スキル

「コミュニケーション能力」において、本音群、気づかい群、うわべ群は、無関心群より高いことが明らかとなった。「コミュニケーション能力」は、「知らない人とでも、すぐ会話が始められる」「初対面の人に、自己紹介が上手にできる」など、関係が開始する際に必要なスキルと考えられる項目が含まれる。また本音群、気づかい群、うわべ群は、場を盛り上げたり、楽しくしたりする「群れ」得点が高いことが共通している。このことから、場を盛り上げたり、楽しくしたりする青年は、関係を開始する際に必要なスキルは高いことが示唆された。

さらに、友人と深くつきあう本音群は、「コミュニケーション能力」に加えて、「自己解決能力」や「関係調整能力」も高いことが明らかとなった。水野(2007)は、対人関係形成・維持過程において、どのような社会的スキルが関係するかを検討し、対人関係を開始する際には、表現性のスキルが、対人関係を進展させていく際には、相手の気持ちを察したり、自分の気持ちをコントロールしたりするスキルが必要となることを指摘している。このことをふまえると、自己解決能力や関係調整能力をもつことが、友人との深いつきあいにつながるということが考えられる。

3. 各友人関係群における精神的健康

無関心群と独立群は、本音群よりも有意に精神的健康の得点が高かったことから、精神的健康が低かった。

松井(1990)は、友人関係の機能の1つに安定化の機能をあげている。つまり、青年にとって友人は、緊張を解消し、不安を和らげる精神安定に必要な存在であるという。無関心群は、「友人」とのつきあいにおいて、深い関わりや群れることを避けることが特徴であり、友人とのつきあいが全体的に希薄で、安定化の機能を欠くため、精神的健康が低くなることが示唆された。

一方、独立群は、「友人」とのつきあいにおいて、「友人」に対するある程度の気づかいと関係の深まりを持ちながらも周りに左右されないことが特徴で、「友人」との深い関わりを避けてはいないが、精神的健康が低かった。岩間(1995)は、青年に「自分の感覚のみを頼りにして、人の目を気にするのはやめる」、つまり、実際そのようにできるかは別として、他者の視線を敢えて無視しようとし、そのかわりに自分の感覚を頼りにする傾向があることを指摘している。独立群は、「友人」との関わりを持ちながら、周りに左右されず、自己を確立しているように表面上は見えるが、「自分の感覚のみを頼りにして、人の目を気にするのはやめよう」という方略を用いて自らの安定を図ろうとしている可能性があり、独立群というより、孤立している群と名付けた方がよかったのかもしれない。

4. まとめと今後の課題

今日の青年の友人関係として、従来の青年期の友人関係の特徴をもつ「本音群」、現代青年の特徴として指摘されてきた「気づかい群」「うわべ群」、友人関係の希薄化傾向に続いて指摘され始めている「無関心群」、さらに、友人に対するある程度の気づかいと関係の深

まりを持ちながらも周りに左右されない「独立群」が見出された。また、「友人」との理想のつきあいについて、どの群も「本音でつきあう」ことをあげており、現代青年の希薄化が指摘されている中で、そのような関係を持ちながらも、「もっと本音でつきあいたい」という思いをもっていることを実証的に示したことは、重要な知見であると考えられる。

友人関係群間での基本的信頼感、社会的スキルの比較の検討では、全般的に「友人」と深い関係を築いている本音群が他の4群よりも高いことが明らかとなった。このことから、もっと本音でつきあいたいと思いつながりながらも、友人関係を親密なものに変えていくことができないのは、基本的信頼感や社会的スキルの低さも一因となっている可能性を示唆しているだろう。

さらに、友人関係群間での精神的健康の比較の検討では、無関心群と独立群の精神的健康の低さが示唆された。独立群は、友人との深い関わりを避けてはいないが、精神的健康の低さが示唆されたことから、表面上は独立しているように見えるが、実際は、孤立している群である可能性もあり、今後さらなる検討が必要である。

本研究の問題点としては、男子の対象者の少なさのために、友人関係に違いがあるとされる性差を分析できないという問題があった。今後、対象者を増やし、性差についても検討する必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいた方々に深く感謝致します。

引用文献

- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. New York: W.W. Norton & company. (Reissue, 1980).
- 橋本 剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 19, 146-155.
- 堀 洋道・松井 豊 1981 学校や交友関係の実態とその影響 学習指導研修, 4(2), 90-93.
- 岩間夏樹 1995 戦後若者文化の光芒—団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡— 日本経済新聞社.
- 金子俊子 1994 青年期の自己—他者関係と基本的信頼感及び愛着スタイルとの関連 日本心理学会第58回大会発表論文集, 348.
- 金子俊子 2002 青年期女子の愛着スタイルが他者関係に及ぼす影響—基本的信頼感から親密性へのプロセスについて— 大阪産業大学論集人文科学編, 106, 31-49.
- 川喜多二郎 1967 発想法 想像性開発のために 中公新書.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店.
- 栗原 彬 1996 やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェイス— 増補新版 新曜社.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 齊藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学 ハンドブック 川島書店 pp.283-296.
- 水野邦夫 2007 どの社会的スキルが良好な対人関係の形成・維持に関連するか 聖泉論叢, 14, 53-59.
- 文部科学省(編) 2002 文部科学白書(平成13年度) 財務省印刷局発行.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本語版 GHQ 精神健康調査表手引 日本文化科学社.
- 中園尚武 2000 現代青年の友人とのつきあい方とソーシャルサポートについての一研究 九州大学心理臨床研究, 19, 79-86.
- 中園尚武・野島和彦 2003 現代大学生における友人関係への態度に関する研究—友人関係に対する「無関心」に注目して— 九州大学心理学研究, 4, 325-334.
- 西平直喜 1973 青年心理学 塚田 毅(編) 現代心理学叢書7 共立出版.
- 西平直喜 1990 成人になること: 成育史心理学から 東京大学出版会.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 千石 保 1991 「まじめ」の崩壊: 平成日本の若者たち サイマル出版会.
- 詫摩武俊・菅原健介・菅原ますみ 1989 羊たちの反乱: 現代青少年の心のゆくえ. 東京: 福武書店.
- 谷 冬彦 1996 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第60回大会発表論文集, 310.
- 谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9(1), 35-44.
- 東京都都民生活局(編) 1979 大都市高校生の心理的特徴と生活環境 同局発行.
- 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係の希薄化の問題との関連から

みた分析— 東京都生活文化局.
上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994
青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育
心理学研究, 42, 21-28.
吉岡和子 2001 友人関係の理想と現実のズレ及び自

己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研
究, 13, 13-30.
和田 実 1993 同性友人関係：その性および性役割
タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.

A study of friendship in adolescence

MAYUMI MATSUNAGA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

SUMIKO IWAMOTO (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The first purpose of this study was to examine the characteristics of friendship in adolescence. 228 university students answered a questionnaire (friendship). By the cluster analysis, five clusters were categorized : 1) close relationship with friends : 2) indifferent to friends : 3) fearful to friends : 4) superficial relationship with friends : 5) independent and respected friend's individuality.

The second purpose was to examine the relation between five types of friendship and two factors : sense of basic trust and social skill. The third purpose was to examine the relation between five types of friendship and mental health. 228 university students answered the questionnaire (sense of basic trust, Kiss-18, GHQ-28). In comparison with each group, the result showed that adolescents of group 1 demonstrated a high level of sense of basic trust and social skill, while group 2 and group 5 demonstrated a low level of mental health.

Key words: adolescence, friendship, sense of basic trust, social skill, mental health